

臨床心理学専攻の学部生にとってのファシリテーター体験

中 田 行 重

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室
E-mail: nakata@po.cc.toua-u.ac.jp

下 川 昭 夫

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室
E-mail: akios@po.cc.toua-u.ac.jp

更 科 友 美

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室
E-mail: sara@po.cc.toua-u.ac.jp

三 好 謙 一

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室

市野瀬 かの子

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室

新 冨 美南子

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室

内 田 優 輔

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室

栗 林 美和子

東亜大学 総合人間・文化学部 臨床心理学研究室

要 旨

本学総合人間・文化学部において臨床心理学研究室所属の2年生に対して構成型エンカウンター・グループが行われた。今回のグループでは大学院生と学部の3年生がファシリテーターとして参加した。本稿の目的は臨床心理学の教育という視点から見て、ファシリテーター体験がその学部3年生にとってどのような意義をもっているのかを探ることにある。

構成型エンカウンター・グループにおいては“ファシリテーター”とは、セッションの課題を教示する役割のそれと、サブグループにおいてメンバーの自己表現を促す役割のそれとの2通りがある。それぞれのファシリテーター体験を学生がどのように感じ、そこから何を学び取っているのか、を学生の自由記述から検討した。

その結果、学生はファシリテーター体験のうちでも特にサブグループの中でメンバーの表出を促進するグループファシリテーター体験に困難と同時に奥の深さを感じ取っていることが分かった。心理臨床の実務をすることの出来ない臨床心理学専攻の学部生にとって、今回のようなファシリテーター体験は心理臨床体験に代わりうる奥の深さを感じさせるものであり、教育的意義があることについて考察した。

1. はじめに

東亜大学総合人間・文化学部臨床心理学研究室では、これまで学部生を対象にした構成型エンカウンター・グループ（Encounter Group、以後EGと略す）を行ってきた。その理由の一つは、本学では学生相談室のカウンセラー不足のために対人関係に問題を抱え、不安定になっている学生がいても、既に相談室は一杯であり、学生をそちらに紹介できず、サポートが十分に出来ないからであった。別のもう一つの理由は、臨床心理学の教育において不可欠な体験的側面を学生に提供するためであった。既に筆者ら（下川、中田）はEGが学部生の仲間作りを援助し、また学部レベルの臨床心理学教育における体験的側面を強化することを見てきた（村山ほか2001, 下川ほか2001）。

そこで今回、このEGのもつ利点を臨床心理学研究室の運営に活かすことを考え、筆者ら（下川、中田）は平成14年度後期、メンバーを臨床心理学研究室所属の2年生に限定し、ファシリテーターを同じく臨床心理学研究室所属の3年生や臨床専攻の大学院生に限定したEGを行った。というのも、臨床心理学研究室はそれだけで多人数の大きな集団であるにもかかわらず、今の大学生には互いに支え合うような仲間を十分に作れない学生が少なくないという印象があるからである。また、臨床心理学を専門にするものが、その根幹の基礎学とでも言うべき自分自身の対人関係を作る、ということが出来ないようでは、たとえ臨床心理学の知識をいくら詰め込んだところで、むしろ臨床心理学のマニアになるだけであり、本当の意味で臨床心理学を学ぶことにはならないからである。また、臨床心理学を志向する者の中には自らの不安定への対応として、それを勉強しようとするものが少なくない。それに加え、この大集団を相手に筆者ら（下川、中田）は2人の教員（平成14年度後期からは筆者の1人である更科が加わり3人となった）で対応しなければならない。不安定な学生が1人いるだけでも、まとも

に対応しようと思えば、それだけで軽く講義1コマ分程度のエネルギーを使うという体験的な実感を筆者らはもっている。大集団となると、その仕事は飛躍的に増えることになる。筆者らはこのマンパワーの不足を出来るだけ解消し、かつ学生の精神衛生へ配慮し、臨床心理学の教育になるような場を提供する必要がある。そこで今回は、メンバーとなる臨床心理学研究室2年生のヨコのつながりを強めるだけでなく、更に学年を超えたタテのつながりをもてるようにと、彼らの先輩の3年生や臨床専攻の大学院生にファシリテーターをお願いした。

これには、もう1つの本学部独自のカリキュラム上の背景がある。本学部では開講科目を受講すべき学年配当が決まっているため、例外はあるが、多くの講義において受講者は同学年である。その結果、同じ臨床心理学研究室所属であっても授業を通してのタテの交流が起こりにくい。このようなことは、対人関係の学である臨床心理学を学ぶ上で相当に大きな問題であると筆者らは考えている。実際、例えば福岡大学の臨床心理学の大学院の話であるが、夜間開講のために年齢や職種の異なる多様な人々が学生として集まっている。そのことが大学院生それぞれに大きな刺激となり、臨床心理の大学院全体が活性化され、学生それぞれの個性が響きあうという教育効果をあげている、と聞く。困っている人を援助するという臨床心理学実践では何よりもまず、人に出会うことが出発点になる。臨床心理学の教育においては、各学年別に科目が定められる小中学校のようなやり方では、大事なものが抜け落ちる。そうした事情からこのようなグループ構成を考えつくに至った。

このようにEGは学生の対人関係の向上や臨床心理学の体験、学習として意味がある。ところで、今回は学部の3年生や大学院生にファシリテーターをさせることにした。このことはファシリテーターを担当した学生自身にとっても大きな学習の体験である。それでも、大学院生の場合はそれなりの経験と訓練、また知識をもっているのだから、彼らにとって今回のファシリ

テーター体験は今までの訓練の延長上にあり、これまでの蓄積を磨くことになるであろう（宮崎ほか、印刷中）。しかし、学部生ファシリテーターにはこの体験にどのような教育的意味があるだろうか。本稿は、教員である中田・下川・更科の3人と、ファシリテーターを担当した総合人間・文化学部の臨床心理学研究室所属3年生である三好、新富、市野瀬、内田、栗林の5人が共同執筆者となり、その点について考えることを目的とするものである。

2. 学部生がファシリテーターを行うことについて

学部生にとってのファシリテーター体験の意味を考える前に、果たして学部生がファシリテーターを行えるのかどうか、という問題がある。その点について筆者らが考えたことを記しておきたい。

一口にファシリテーター体験を学部生が行うとはいっても、ファシリテーターという仕事は奥が深く、簡単に出来るものではない。例えば、わが国のグループ・アプローチ研究の権威の1人である九州大学の野島一彦氏が学生にファシリテーターを体験させるのは大学院生になってからである。それも先ず、学内、学外それぞれにおいて最低、数度のメンバー体験をし、一方でEGについての理論的な学習を積み重ね、その上、EG運営の助手やファシリテーターとしてベテランのファシリテーターの陪席をするなどの経験をした上でファシリテーターを体験させる、という順序をとっている。従って、今回、筆者らが本学の3年生や大学院生にファシリテーターを任すことが可能かどうかは大きな問題であった。

しかし、筆者らは検討の結果、今回のEGが非構成型のEGではなく構成型であること、筆者ら教員が同じ場にずっと居ること、そして、メンバーおよびファシリテーター、教員が全員、同じ空間を期間中連続して共有すること、また本学の臨床心理学専攻の大学院生も4名がファシリテーターとして応援参加すること、な

どの点から、準備と配慮が十分出来れば可能であろう、と判断した。

とはいえ、キャリアを積んだファシリテーターの場合でさえグループには準備が必要である。今回は学部生ファシリテーターの学習の意味も含んでいる。そこで、教員が指導しつつ、共に準備を行った。本稿では先ず、その準備や配慮をどのようにしたかを記載する。その上で、学部生の各ファシリテーターにとって今回の体験がどのような意味をもったかについて、その感想を記述する。その上で、学部生が同じ学部生のメンバーに対してファシリテーションを行うことの意味について考察したい。

3. エンカウンター・グループを行うまでの準備および配慮

これ以降、本稿では2種の「ファシリテーター (facilitator、以後 fac と略す)」という用語を用いるので先ず、その意味を確認しておきたい。「セッションファシリテーター (Session Facilitator、以後 SF と略す)」とは或るセッションのリーダーとして参加メンバー全員の前に立ってセッション内容や留意点を教示・説明しながら、セッションを進める fac であり、各セッションにつき、1人が担当する。「グループファシリテーター (Group Facilitator、以後 GF と略す)」とは5つに分かれた各8~9名程度のサブグループの fac である。その役割はグループの安全感を高め、メンバーの自己表出を促したり、表現されるものを出来るだけ受容するというものである。

SFは筆者らのうち4名（三好、新富、市野瀬、内田）である。この4名は自分のセッションを担当している以外のセッションでは、GFとしてサブグループの1つに入った。この4名以外に筆者らのうちの1名である栗林を含む7名（大学院生5名、学部生2名）がGFを担当した。各グループのGFは2名（1グループに限って3名）である。GFは2日間を通じて同じサブグループを担当した。

今回、EGの4つのセッションを筆者らのう

ちの4名（三好、新富、市野瀬、内田）がSFとして担当することが夏休み前に決まった。その為、EG実施日の9月28～29日まで、夏休みを挟んで約2ヶ月あまりを準備期間としてあてることができた。教員（中田・下川・更科）らとSFは3回のミーティングを行った。ここではその経過を順に述べる。

【第1回目…7月24日】

このミーティングは教員がSF、GFについての説明をした上で、「プログラム構成」「セッション担当者自身がどのような内容をする事ができるのか」「担当するセッション」という3点を中心に進め、EG全体の大まかなセッションの枠組みを決めた。そして次回のミーティングまでに、各SFが担当するセッション内容をどのようなものにするか、教示も含め、細かく考えてくることを夏休み中の課題としてこの話し合いを終えた。

【第2回目…9月20日】

第1回目のミーティングの課題であったセッション内容の説明を各SFが行うことから始まった。担当者は自分のセッション内での教示方法やプログラムの順番などに対して幾重にも配慮を重ねて内容を練ってプリントにまとめた。そして各セッションを行なう上での注意点や問題点などを教員と話し合い、全体を通してどのようにプログラム構成を行えばEGが滞りなく進行していくかなどを検討した。

【第3回目…9月24日】

「EG全体の流れ・セッションの最終確認」を目的として話し合った。また、今回はGF担当の大学院生との顔合わせも行った。先ず、SFそれぞれが担当するセッション内容の最終説明、及びそのセッション内容に対する質疑応答を行い、どの担当者がどのようなセッション

を行うのか、またその時の留意点などを確認した。また、参加メンバーである本学部臨床心理学研究室所属の2年生全員を5つのサブグループに分けて、名簿を作成した。各グループには2名（1グループは3名）がつくが、各サブグループを担当するGFの配置を決めた。その際、多様性や安全性の観点から、GFが同性同士でないように、かつ、院生と学部生が組むように配慮しながらGFの組み合わせを決めた。

4. エンカウンター・グループのプログラム

4.1 EGプログラム

メンバーは本学部臨床心理学研究室所属の2年生で、半年前に同じく2日間にわたる構成型EGを体験したことがある。

今回のEGプログラム構成およびスケジュールは表1のとおりである。

タイムスケジュール	1日目（9月28日）	2日目（9月29日）
～9:30	スタッフ&学部生集合	スタッフ&学部生集合
9:30～10:00	オリエンテーション(教員)	出席確認
10:00～12:00	第1セッション “ボディーワーク”(fac.A)	第5セッション “エクササイズ”(fac.D)
12:00～13:00	休憩・スタッフミーティング (教員 fac. 全員)	振り返り・アンケート・ 参加者解散
13:00～15:00	第2セッション “時間軸コラージュ”(fac.B)	スタッフミーティング (教員 fac. 全員)
15:00～15:30	休憩・スタッフミーティング (教員 fac. 全員)	
15:30～17:30	第3セッション “人間彫刻”(fac.C)	
17:30～18:30	休憩・スタッフミーティング (教員 fac. 全員)	
18:30～20:30	第4セッション“懇親会”	
20:30～	解散	

表1 平成14年度後期学部エンカウンター・グループのスケジュール

4.2 プログラム構成の概要

学部 EG は表 1 のように進められた。今回このようなプログラム構成にしたのは、体全体を使う「ボディーワーク」と「人間彫刻」を連続して行うとメンバーの身体にかなりの負担をかけることになってしまうのではないだろうかと考えたからである。まず、比較的緩やかな動きの「ボディーワーク」を第 1 セッションで行い、次に「時間軸コラージュ」を行い、その次に「人間彫刻」という身体を使うセッションとし、身体の課題と認知課題を交互にするようにした。最後の「エクササイズ」はメンバー間に親密性が必要な内容なので、1 日目よりは 2 日目に組み入れるほうがよいと判断した。

各セッションの内容は以下のとおりである。

第 1 セッション…ボディーワーク (担当: fac.A)

目的: 簡単なリラクゼーションとマッサージを行い、今の自分の状態に気付く。また Blind Walk により、普段気付かなかった自分に気付いたりする自己発見や相手を気遣うことによる他者理解を深める。

内容: 身体を緩め、EG に対する緊張が少なくなるようにリラクゼーションとして自律訓練法の技法を用いて、体の力を少しずつ抜いていった。その後、消去運動をしてマッサージを行い、身体の疲れを取っていった。そして Blind Walk を行うことの出来る状態にまで覚醒水準を少しずつ元に戻していった。そして、各グループずつ Blind Walk を行なった。

第 2 セッション…時間軸コラージュ (担当: fac.B)

目的: 自分の過去・現在・未来をコラージュで表現することにより、自己発見や自己理解を促進する。また、シェアリングにおいて相手の作品に触れることで他者理解を促進する。

内容: まず、B4 サイズの紙を三分割し、そこに雑誌・クレヨン・色鉛筆で「過去・現在・未来」のイメージをコラージュで創作してもらう。表現したくないような時間軸の部分は空白のままでもよいと教示しておく。コラージュが完成したらその作品にピッタリとくる物語を想

像してもらう。全員が出来上がった時点で自分の作品や他の人の作品を見ながら話し合いながら、シェアリングを行った。

第 3 セッション…人間彫刻 (担当: fac.C)

目的: 相手に体を預けることや、預かることなどの非言語的コミュニケーションにより、お互いの信頼感を促進し、身体感覚を開放する。そして、自分と相手の体に対する気付きを促進させた後、身体の体験を言語化することによりその時の体の感じを把握する。

内容: グループごとに彫刻家グループ(相手の体を動かす人たち)と素材グループ(動かされる人)に分かれて、素材グループは目を閉じ円になって座る。彫刻家グループは声を出さないようにして素材の後ろに立ち、マッサージなどをしながら素材をリラックスさせ、その素材の人にあった感じを生かしながら体を動かして彫刻を創っていき、完成したら静かに別の素材のところに移っていく。これを 2 回繰り返したら別の彫刻家が素材の人の下に行き、話を色々としていった。そのとき素材の人は自分が動かされて作られた体の感じを題名にして彫刻家の人に話してもらった。その後、彫刻家グループと素材グループは入れ替わって同じ事をしてもらった。全体が終わったら各グループでシェアリングを行なった。

第 4 セッション…懇親会

目的: 今まででは話さなかった人と話せるような場をサブグループの枠組みを超えて作り、その中で各自がどのように、どのような人間関係を作り上げることができるかを模索する。

内容: このセッションは懇親会という枠はあるが内容は本学部の 2 年生が主体となり計画していくノンタイトルのセッションであった。買出しの時点から 2 年生に任せて自由にセッションが進むようにしてもらった。

第 5 セッション…エクササイズ (担当: fac.D)

目的: 相手とコミュニケーションをとりあう様々なショートエクササイズを組み合わせて行うことによって、ふれあいや関係づくりを促し、自己肯定感を高める。

内容: 2 日目最初のセッションなので、まず

は“肩もみジャンケン”“後出しジャンケン”“アウチ”“フリーウォーク”などの主に身体を使ったコミュニケーションを中心にしたショートエクササイズを組み合わせながら行なった。メンバーの緊張が解きほぐれてきたら、各グループを4～6人の小グループに分かれてもらい、その小グループの中で他己紹介を行い、こちらで用意したトピックについて1人ずつ話をしていき、その後シェアリングを行なった。次に、自分の好きなところを1人1分程度で順に言っていくエクササイズを行い、最後にシェアリングを行なった。

5. 学部生ファシリテーターの感想

次に、学部生 fac が今回の体験をどのように感じているかについて自由に書いたものを以下に記載する。

fac.A (第1セッションのSF, およびGF)

今までに学部生対象のEGには何回か参加した事もあり、GFも1度経験していたので少し余裕を持っていたのだが、先生(教員)の「今回のSFを3年生に担当してもらおう」の一言で、自分の余裕はきれいに無くなってしまった。SFは初めての事だったのでとても不安であったが、なぜかワクワクしていたところもあった。

実際、今回のEGに参加し、自分のセッションが一番初めだったこともあり、EGを行なう前のアンケートに書いた“とても緊張している”という言葉が一番適切だった。事実、自分が担当するセッションが始まると、緊張している自分に笑いが込み上げてきてしまうほどであった。しかし、セッションを進めていくうちに段々と体の余分な力が抜けてきて、ほどなく緊張も全く消えた。その後の自分のセッションも順調に進めていくこともでき、たいした問題も出てこなかったためSFとしては初めてにしては良かったほうではないかと感じた。自分のセッション以外はGFとして自分のグループに入ってメンバーの人と一緒に様々なセッションを行なっていった。今回、自分がGFを

するにあたって、シェアリングなどの話し合いを行なう時に自分から話し出したり、話の方向性を決めたりしないようにして、そのときのグループの雰囲気に任せて自分も一緒にその場の流れを味わいながら、体験しようとする“参加的”な姿勢をしていこうと考えていた。実際にEGに参加してみると、自分が入っているグループはものすごく盛り上がるような雰囲気ではなく、静かな中でゆっくりと展開していくタイプだった。初めの内は沈黙が長く続くこともあったが、徐々にメンバー同士で話し合いも進んでいくようになり、目標としていた“参加的”な姿勢のままに終わったことは良かったと感じた。

このように全体を通して見ていくと、今回のEGは自分にとってとても深く考えさせられるものになった。今までのEGはメンバーとして常に受身で参加していて、このセッションはいったい何を目的として行っているのだろうかと思いに思っていたところもあったが、今回このようにEGのプログラムを構成していく側になって初めて、EGの奥深さに触れることができたと思う。またセッションを構成していくことで、どのような目的でこの様なプログラムが出来ているのかなどを考えることができ大変良かったと感じた。先生の話や壇上で聞くだけでは多分、学ぶことがなかったような学習ができたと思う。こういう点で、自分にとって大変有意義な時間をEGの間で感じていたし、EGの準備期間にも色々と勉強させられることもあったので、今回のEGはとても素晴らしいものとなった。

fac.B (第2セッションのSF, およびGF)

今回のEGで初のSFを経験した。GFは半年前のEG(4月に同じく臨床心理学研究室所属の2年生相手に行われた)でも担当したが、今回はSFも同時に受け持ったので、前回よりもプレッシャーを感じながらEGの開始となった。

先ず、GF経験について。形式が構成型であったため、グループごとに違った雰囲気を

もっていたが、自分が入ったグループ（第1グループ）は、GFが2人（院生と自分）とメンバー9人から構成されており、その9人もバラバラではなく普段の関係から3グループぐらいに分かれる感じになっていた。

全5セッションの2日間をメンバーと過ごしたが、11人が輪になった状態での促進というのが1番難しく感じられた。それは何故かその状態になると沈黙を迎えてしまうからであった。そこで、その沈黙をいつまで守るか、どのようにして話を出すか、どんな話を出すか、誰に話しかけるかなどのタイミングに深く悩まされることが多くあった。時にはGFがお見合いの形となってしまったり、沈黙を迎えそうだと早合点してしまうことも目立ち、自分のペースを乱される気もしていたと思う。しかし沈黙が多い分、グループの様子を隅から隅まで落ち着いて見ることが出来ていたとは思った。

次に、初めてのSF体験について。時間軸コラージュを担当したが、2時間という決められた枠組みの中で予定通りに進行するのは容易ではなかった。このとき自分はGFとしてグループに入っておらず、SFとして全体を見ていたので、各グループの様子を様々な角度から見る事が出来た。そして、やはりグループの数だけ進行の違いがあるということを知った。それに関連して、ゆっくりと各グループの様子を見ていると、全体や各グループの見る角度を少し変えただけで、あまり位置を変えていないものが全く違って見えることには驚かされた。どの場所からでも大よそ予測のできる情景が、いざその場所にいってみないと本当の姿は見えないと深く考えさせられた。

facをして2日間を終えたが、よかったと思えた分だけ反省する部分も見つかった。GFとしては促進の仕方、GF同士の関係、GFとして踏み込んでいいメンバーの内面の範囲、そしてそのタイミングなどについての反省点があった。SFとしては、進行の仕方、声の出し方、教示するタイミング、緊張してしまったことなどの反省点が挙がった。GF、SF両方において、多くのことを考えることになった。ともあ

れ無事に終われたと感じているので、このEGはまた1つの有意義な経験になったと思える。

fac.C（第3セッションのSF、およびGF）

私がSFを担当した第3セッションでは、ノンバーバルなコミュニケーションを通して、「体の感じ」を感じてみることを目的とした。終了後のアンケートから、「体の感じ」を感じられた、あるいは少し感じられたという回答が33名中（回答のない1グループを除いた）26名から得られた。残りの7名からは、感じられなかった、分からない、難しかったなどの回答が得られた。2/3以上のメンバーは何らかの体の感じを得られたようである。

「体の感じ」を感じられないと答えたメンバーは、自由記述において、相手が誰か分からない状況で体を預けることに対する不安感を述べている。ある程度の不安は、本人あるいはグループの成長に繋がり得ると思うが、極度の不安があった場合はエクササイズを棄権してかまわないことを教示として伝えるべきであったと考える。また、「相手をよく知ってからやったほうがいい」との意見や、「他人」や「知らない人」という言葉が6箇所あり、第3セッションの時点ではグループ内の親密感が高まっていなかったことが考えられる。

この親密感を高めるためには、シェアリングが重要であったと思われる。グループによっては、エクササイズ中に感じていたことや相手への思いなど発言の増えたところもあったようだが、シェアリングの場が崩壊しているようにみえるところもあった。セッションの準備段階で、エクササイズの内容については色々と検討したが、それをどのようにシェアリングするかについては、検討が足りなかったと感じた。実際セッションを担当してみて、シェアリングはエクササイズ中に溜まった気持ちの確認や相手に伝えたかったことを持ち込める場であり、エクササイズ以上に重要であると感じた。エクササイズの体験を深め、メンバー同士の相互理解につなげるためにシェアリングの場作りが大切であると考えられる。

そのためにも、GFの役割が重要であったと思われるが、これはSFよりも難しかった。2日間、色々な思いを抱えながら全身をフル回転させて試行錯誤を繰り返した。学部生として普段一緒に学んでいる私が、facとして受け入れられるかという不安と緊張感のせいかな笑顔が張り付いてしまったときもあった。しかし、最後にメンバーと輪になって頭を突き合わせながらアンケートを書いているときには連帯感のようなものを感じた。あのときの感覚は大変貴重な体験となった。

fac.D (第5セッションのSF、およびGF)

今回初めてEGのセッションファシリテーターとグループファシリテーターを経験させていただいて、今さらながら本当に畏れ多いことだな、と思っている。貴重な体験と機会を与えていただいたことを本当に感謝している。

私は、EGは言うなれば一つの道具だと思っている。以前に自分が参加者体験をしたことから、EG後に気まずさがあり、EG中に会った人と近づくのがためらわれたり、現実の日常生活に対して一時的にちょっと違和感を覚えたり、時にはEG中に特に親しくなった人と、たまに連絡を取り合い、少しずつ緊密さは変化しつつも、交流を続けたりもした。それらのことは、EG中に教示があれば、少しはソフトに受けとめられることだったと思う。今回は行わなかったが、『エンカウンター 心とこころのふれあい』(国分 1981)が参考になると思う。自分も何回かこういったグループ体験をしてきて、少しだけこのEG等グループ体験という道具の近づき方、距離感のとり方がわかってきた気がしている。

今回、まずSFとして今回、一番重要だと考えたことは、参加者が同学年の同コース選択者で、学校で(様々なキョリがあるだろうけれども)顔を合わせている、なじみの日常的な存在同志である、ということだった。私は“日常の積み重ね”というものに対して、出来る限り何もするべきではないと考え、特に自分のセッションは物足りず、料理に例えると、何の味が

したかよくわからないぐらいが丁度いいと考えていた。そこで、前半のエクササイズでは、ふれあいの活性化をねらいとし、後半はそれぞれが2~3分ほど自分の話を聞いてもらえる体験ができればいいな、ということをお願いしていた。また、メンバーのいいところを探すエクササイズを、ぜひ入れたいと思っていた。自分の気持ちとしては、日常から一步ふみ出したところ以上のものはすまい、という感じだった。結果は、全体にわりと交流のある、和やかな雰囲気の流れていた気がする。初めてのSFだったが、ビギナーズラックというべきか。

セッション後のアンケート・コメントから、このセッションについての、難しさ、きつさ、ぎこちなさ等の違和感、恥ずかしさ、進行についての問題点などを指摘した意見をあげておく。「後半のエクササイズで、これまでのグループを半分に分けたが、最後にまた1つのグループにもどして、『よかったこと』を言い合うとよかった。2日間一緒に過ごした仲間、また大きくもどりたい。いろんな意見が出る、考える時間になっただろう」「時間を決めると難しいような気がした。」「人と話すことってのは大切なことだけど、精神的にととてもきつい」「あまりマイクを通して話されると、話の途中でとぎれてしまうので、ちょっと困りました」「以外に面白かったが、恥ずかしかった」「語るのって難しい」などである。改善点としたい。アンケートを読ませていただいたときには、自分がこのようなものを読んでいいのだろうか、手がふるえて、聖域に入ったような感じがした。

一方のGFであるが、これは難しく、まだ全然無理だった。今後、非構成型のEG等に参加して、それらのあり方について学びたいと思う。

fac.E (2日間を通してGF)

私がEGのfacを試みようと思ったのは以前にメンバーとしてEGに参加した経験があるからである。メンバーとしての参加ではなく、違う観点から自分を見つめなおすと、どういっ

た自分が現れてくるのか知りたかった。実際行ってみると、前に参加したときよりも客観的に自分を見つめ返すことができたと思っている。前は自分の内面を話さなければいけないと思ひ込み、きつい思いもした。今回はGFということだったので、皆が感じていることに共感し、話しやすい場を作ることの難しさを知った。今回のEGでは自分が沈黙の中でどれだけ共感的理解をすることが出来るのか、援助していく立場になった時、どのようにしていくのが分かったことがよかった。

難しかった点としては、沈黙になった時にどうやって話し始めるか、待つのか、こちらが話すのか、何かを促すようにするのか、誰に促したらスムーズに行くのかなどである。どうやったらよいか分からないまま、こちらがしゃべってしまい、自分がついしゃべり過ぎてしまった、と感じることもあった。

6. 学部生がファシリテーターを行うことについての考察

以上は学部生 fac が自由に書いた感想ではあるが、そこには fac 体験として共通のものが見られる。その1つは難しさを感じた、ということである。とはいっても、SF と GF ではその難しさに質の違いが見られる。SF では人前で話すことの緊張 (fac.A 及び B)、教示の仕方 (fac.B 及び C) などである。それに対し GF では、どのようにメンバーに関わるか、沈黙するか声をかけるか (fac.A~E)、出しゃばっていないか (fac.E) などである。

上述したように、野島一彦氏が学生に fac を任せる場合、先ず大学院生でなければならず、その上でメンバー体験やサブ fac 体験および理論的な学習を踏まえている。つまり、EG はそれだけ奥が深く、難しい、ということである。感想にあるように、学部生として fac を体験した筆者ら (三好、新富、市野瀬、内田、栗林) は fac の仕事の難しさを感じ、勉強になったと感じている。fac にとって、今回の EG は構成型であり、メンバーも同じ顔ぶれで以前も構成

型 EG (プログラム内容は異なるが) を体験したことがあり、また準備を重ね、教員に囲まれ、院生 GF にサポートされながらの fac 体験であったが、それでも難しさを感じている。

実際の心理臨床の実務を行うことが許されていない学部生にとって、GF としてメンバーの自己表出を促したり、それに対応するという体験は、心理臨床の実際においてクライアントの自己表現を促したり、それに対応することと相似の体験である。その体験の中に難しさを感じたことは、ごく一部ではあるが、心理臨床の世界の奥深い難しさに触れる体験であったと言える。

また、GF としてメンバーへの対応に難しさを感じて、反省点 (fac.A) や今後の改善の必要性などを感じている (fac.D)。これは、自己研鑽の必要性を認知していることである。これは心理臨床において成長してゆくためには、スーパービジョンや教育分析を受けなければやっていけないとその本人自身が感じることと相似のものと言えるだろう。

その点、SF としての難しさは課題の意味をどう伝え、どう課題構成をするとスムーズに進み、目的に合致するかなど、主に認知的な側面についてのものである。また、これも人と触れ合う体験を通しての自己研鑽が必要であるの言うまでもないが、同時に fac.D が述べているように文献を読む学習を積む必要もあるだろうと思われる。それによって他の EG の fac のやり方の中から参考にしたり、身につけるべきものが見つかるだろうと期待されるからである。そのような文献学習が参考になりにくい、という点では fac.C や fac.D が述べるように、GF のほうが SF よりもはるかに難しいと思われる。

難しさ以外の気づきとしては、fac.A の言うように、EG のプログラムを構成していくような側になって初めて、それまでのメンバー経験では分からなかった課題の奥深さに触れることができた、ということがある。また、fac.B の言うように、各グループごとに進み方が異なる、という当たり前の、しかし重要な認識も起

こっている。また、シェアリングをどのようにすればよいか、という重要な課題に気づいている (fac.C)。これらは、キャリアを積んだ臨床家でも容易に答え切れない極めて奥深いテーマに学部生 fac が気づいていることを示している。

以上、学部生 fac 体験の意義をまとめると、心理臨床の実際と相似の体験が出来ること、自己研鑽の必要性を自発的に感ずるようになること、文献学習の必要性に気づくこと、奥深いテーマに気づくこと、と言えよう。これらの意義を考えると、EG をメンバー体験に限定せず、fac 体験も含むようにすることも考えてよいのではないか。確かに fac は難しいし、奥の深いものである。従って、fac 体験をさせるためには様々な配慮が必要であろう。しかし、fac 体験の意義を考えると、そうした配慮をしてでも学部生に体験をさせることは十分価値があるように思われる。例えば、参加する学部生全体で確認して、セッションで交代しながらの fac 体験などをやってゆくことが出来ないだろうか。その体験はロールプレイ的な側面を含むやや浅いものになるであろうが、その浅さは、深く入り込まずに済む、という安全性を高めるであろう。このように安全性が確保されれば、学部生の fac 体験は試みる価値があるように思われる。

の試み (2)』『東亜大学臨床心理相談研究センター紀要』創刊号、53-62

引用文献

- 国分康孝 (1981) 『エンカウンター』誠信書房
- 宮崎保成・尾崎典子・小林純子・白井裕浩・末續貴子 (印刷中) 「後期学部 EG 活動報告——ファシリテーターの視点から——」『東亜大学総合学術研究科臨床心理学専攻紀要』第2巻
- 村山正治・下川昭夫・中田行重・鎌田道彦・田中朋子 (2001) 「臨床心理学の体験的教育としてのエンカウンター・グループ——大学生の対人関係の促進効果もふまえて——」『総合人間科学 (東亜大学総合人間・文化学部紀要)』創刊号、8-91
- 下川昭夫・深津典子・村山正治・中田行重・澤井万七美・鎌田道彦・天野裕子・上藺俊和、向野ミチ子 (2001) 「大学生の仲間づくりに対する支援

Facilitator Experience for Undergraduates Students in Clinical Psychology Major.

NAKATA Yukishige

Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia
E-mail: nakata@po.cc.toua-u.ac.jp

SHIMOKAWA Akio

Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia
E-mail: akios@po.cc.toua-u.ac.jp

SARASHINA Tomomi

Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia
E-mail: sara@po.cc.toua-u.ac.jp

MIYOSI Kenichi

Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia

ICHINOSE Kanoko

Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia

SHINTOMI Minako

Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia

UCHIDA Yusuke

Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia

KURIBAYASHI Miwako

Division of Clinical Psychology, Faculty of Integrated Cultures and Humanities,
University of East Asia

Abstract : Structured encounter group was offered to the second year undergraduate students of University of East Asia, Faculty of Integrated Cultures and Humanities, Division of Clinical Psychology. Some third year undergraduate students of the same division and graduate students of clinical psychology major participated in the encounter group as facilitators. The paper aims to discuss how meaningful it is for the undergraduate facilitators in the view of clinical psychology education.

The term "facilitator" means both a facilitator who gives instructions to members about the session in charge and a facilitator who facilitates them to express themselves. The paper explore what they learned out of the two kinds of facilitator experiences with use of the facilitators open-ended comments.

It turned out to be the experience of group-facilitator who expedite members' expressions that they felt difficulty and meaning in. The paper argues that the facilitator experience can be an deep educational opportunity for undergraduate students who are not allowed to do clinical practice.